

## 不登校を未然に防止する風土 「居場所づくり」から「きずなづくり」について

### 不登校生徒の状況

集団生活の不適応や起立性調節障害等の心身の不調により、不登校になるケースが多い。不登校生徒の多くは集団と違う生活スタイルになるが、それに対して周囲の理解があり、多様性を尊重し受け入れてくれる環境があると、継続的な登校につながるができる。

### 具体的な取組

#### 【特活、道徳での「話し合い活動」】

4人グループで【話し合い】をする。  
1人ずつ意見を言う中で、まず受け入れる(否定しない)。受け入れた上で話を進めていく。自分の感想や思い、疑問を大切にすることで、一人一人の意見を大切にする風土づくりを育む。



#### 【承認活動】

行事での委員会活動や係活動を通して行ったことを学級・学年だよりで紹介したり、労ったりする。

クラスのために自主的に動いてくれた事柄を、帰りの学活等で発表している。自分の行いを認めてもらえていることが心理的安全性につながる。

#### 【スモールステップと多様なニーズへの対応】

教室に入ることが難しいなら「まずは部活だけの登校もあり！」という教員の柔軟な考え方や、教職員同士本音が言いやすい関係性を築くことで、多様なニーズも検討して、できる範囲で対応する。それにより生徒のきずなづくりの幅を広げることができる。

#### 【「多様性」を認める力の育成】

違いを理解し認め合う心の育成により柔軟な受けとめができる。生徒の自主性・主体性、自己指導能力の育成を図ることで、自分の今やるべきことを意識できる生徒が多い。周囲の生徒が柔軟に受け入れてくれる環境ができると不登校になりづらく、定期的に登校できる。

### 成果

基盤となる多様性を認める柔軟な心の育成を図り、きずなづくり＝不登校を生まない風土づくりにつなげている。理解ある環境の中で、生徒が主体となる小さなステップを踏んでいくことで、継続的な登校ができている。

### 課題

未然防止はもちろんのこと、学校全体で速やかな情報連携を図り、初期対応を迅速に行うことが課題といえる。

## 不登校に係る居場所づくり・きずなづくりについて

### 不登校生徒の状況

本校には現在不登校生徒が 25 名いる。令和 5 年度 1 学期までの出現率は 4.16%であった。最も多い理由は「不安」が 37%、次は「無気力」の 27%である。大きなきっかけもなく、友人関係や集団に入ることには漠然とした不安を抱く生徒が増え、保護者が生徒の生活リズムをコントロールできない家庭も多く見られる。

### 具体的な取組

#### 【別室対応による生徒の支援】

校内に別室（支援室）を設置し、集団への不安等で、教室で過ごすことが難しい生徒のために、安心して過ごせるような場所を提供している。支援室の環境整備やルールづくりを行い、オンライン授業を実施している。現在、11 名の生徒と 3 名の支援員が在籍している。

#### 【特別支援委員会と諸機関との連携】

週 1 回の特別支援委員会で養護教諭や SC・SSW も交え情報を共有、支援の方向性を確認している。行事に際しては、配慮事項の検討や各分掌と調整を行い、全校体制で支援するようにしている。必要に応じ、医療機関や子ども家庭支援センター、市の教育支援室とも連携している。

#### 【校内研修】

年度当初に「生徒理解研修」を行い、全校で支援が必要な生徒の共通理解を図った。また、7 月に「hyper-QU 研修」にて各学級の現状分析、9 月に SC による「不登校理解研修」を行った。



#### 【魅力ある学校づくり】

ユニバーサルデザインを取り入れた学習指導や教室整備を行い、分かりやすい授業と落ち着いた環境づくりを目指している。また、行事では生徒の主体的な活動を促し、生徒が互いに称賛する場面を設定している。



### 成果

全国学力・学習状況調査では、「学校が楽しいか」に対し、令和 3 年度から、徐々に肯定的な回答割合が上昇している。また、学校内外の機関等による相談・指導等を受けていない生徒数が、令和 3 年度の 8 名から今年度は 1 名に減少したことが成果である。

### 課題

不登校の要因が複雑化し対応が困難な例が増えたこと、加配措置終了後の人手不足、支援室運営の予算不足が今後の課題である。